

四つのキーワードで探る「見えないからこそできること」

著者	広瀬 浩二郎
図書名	特別支援教育の基礎 : 確かな支援のできる教師・保育士になるために. 土橋圭子 [ほか] 編.
開始ページ	324
終了ページ	325
出版年月日	2009-09-05
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009090

(2) 当事者の思い

① 視覚障害のある方

四つのキーワードで探る「見えないからこそできること」

全盲の私が国立民族学博物館（民博）に就職したのは2001年である。21世紀となった現在、視覚障害者が地域の学校に通うこと、一般大学に進学することは珍しくなくなった。しかし、今でも大学卒業後の就労、役割とやりがいを感じつつ働くとなると、種々のハードルが残存している。ここでは私自身の就職活動、そして晴眼者に囲まれて仕事を続ける日々の実体験を通して、今後の特別支援教育に期待することを述べてみよう。

マイノリティである視覚障害者が健常者中心の社会で自信を持って生きていくためには、「見えなくてもできること」ではなく「見えないからこそできること」を自分なりのやり方で探していかなければならない。このように視覚障害者のオリジナリティを追求するヒントとバイタリティを与えることが、特別支援教育の眼目だろう。「見えないからこそできること」を開拓するキーワードとして、私は以下の四つを挙げたい。

- ① 手を磨く：点字を読むことに代表されるように、視覚障害者は日常生活において晴眼者以上に触覚を活用している。視覚障害者の伝統的職業である按摩・鍼・灸は手技療法とも称されるが、人間の「さわる」力にこだわる手仕事だといえよう。私自身も近年、各種のワークショップに関わる中で、「手学問」「触文化」などの言葉を用いて、視覚障害者のライフスタイルを再評価することを提唱している。
- ② 足を磨く：目が見えなくなると、移動の自由が奪われる。歩行訓練によって、一人歩きのテクニックを身につけることは不可欠だが、少々ぶつかったり迷ったりしてもめげない精神力、周りの晴眼者の目をうまく利用する方法を実践から学ぶことも重要だろう。学生の頃から私は、「論文は足で書く」ことをモットーとしてフィールドワークを繰り返し、どうにか今日に至っている。
- ③ 耳を磨く：触覚と同様に、視覚障害者は聴覚を使うことも多い。中・近世の琵琶法師、盲人箏曲家は、『平家物語』のような文字を媒介と

しない語り物、すなわち聴覚に訴える芸能を創造・伝播した。私は文献だけでなく聞き取り調査を積み重ねて、琵琶法師の歴史を明らかにしてきた。視覚情報に惑わされず、じっくり他人の話を聴くというのは「見えないからこそできること」に通じるかもしれない。

- ④ 口を磨く：喋ることに限らず、視覚障害者にハンディは存在しない。弁護士や教師など、口を駆使する職業をめざす若い視覚障害者も増えている。大学での講義、一般向けの講演は私にとって口で勝負できる自己表現の場である。周囲の様子にお構いなく大きな声で話をして聴衆を買うのは避けるべきだが、自己主張は生きる基本だから大切にしたい。

考えてみると、私が手・足・耳・口の可能性を実感したのは盲学校時代である。中学・高校の6年間に盲学校で培った世界観と人間観が、今の私の民博での仕事、「見えないからこそできること」の模索につながったのだと思う。クラスメイトと競争しながら楽しんだ点字の五十音書きのレース、白杖歩行の訓練で東京の街中をふらふら歩いた冒険、さまざまな音を頼りに校庭を走り回った体育の授業、生徒会役員として大真面目に行った稚拙な演説などなど。これらは私の青春時代のよき思い出であり、生徒の数が少ない盲学校ならではの貴重な経験といえよう。

もちろん、晴眼者（普通）と視覚障害者（特殊）を機械的に分ける20世紀の教育システムが多くの問題を含んでいることは否定できない。一方、私はいわゆる統合教育の失敗例もたくさん知っている。点字教科書が確保できない不十分な学習環境、教師や同級生の無理解により、手・足・耳・口を磨くことができず、目が使えないコンプレックスのみを味わって卒業する不幸なケースもよく見受けられる。

隔離教育の形でなく、地域の学校において視覚障害児が「見えないからこそできること」を自然に習得するのが、特別支援教育の目標である。手・足・耳・口を磨いた若い視覚障害者が21世紀の社会で生き生きと活躍するためには、特別支援教育の更なる充実が必須だろう。

（廣瀬 浩二郎）

参考文献

廣瀬浩二郎（2009）「さわる文化への招待－触覚でみる手学問のすすめ」世界思想社